

も行っている。しかし、飢餓に苦しんでいる地域があることも事実であり、資金力がある国や企業が、自然の残る資金力のない地域を破壊していることも事実である。日本は海に囲まれていることから、海に生息しているものは恵みとして採取、捕獲してきた。しかし、現在、あまりにも多くのその他の恵みがある。それでも日本人はクジラやイルカをお役御免にしないというのだろうか。日本が商業捕鯨の再開を声高に叫び、実行すれば、世界百数か国も同様に商業捕鯨を行うことを容認せざるをえないだろう。その結果がどのようになるかは明々白々である。自国の利益のみを主張する滑稽さを自覚し、地球の生態系保護を念頭に責任ある行動を取るべきである。また、イルカ漁についてだが、イルカ肉の必要性とともに、漁の方法についても問題を禁じえない。つまり海洋に棲む動物を「資源」として扱っており、哺乳動物であるにもかかわらず、動物としての保護がなされていない。日本にも動物の保護に関する法律がある、生活の場が海洋であっても動物としての扱いをすべきであろう。

2冊の本を読んで

「ステラレニャン物語」と「たったひとつの思い出」

2冊の本が出版された。両方共捨てられた犬猫のことが綴られている。しかし、そのギャップは大きい。

「ステラレニャン物語」は、冒頭の文句に”ステラレニャンという純血種ですのでたいへんかしこいのです”とあるように著者と捨て猫との出会い、猫との生活を、猫の行動を理解し深めていく中から織り成している暖かさがあります。こんな里親さんを見付けられたらうれしいような有り難さ、ホッと息をつく快さです。

「たったひとつの思い出」は、真実であるからこそ、あまりにも救いのない本当です。誰もが触れると痛むからこそとしていたものを、吹き出させた苦しさです。保健所へ行ったケンとコロ。毎日毎日、「たったひとつの思い出」のケンやコロがいることを私達は知っています。そして、ほんの一握りの「ステラレニャン物語」があるのです。

同じ動物がたどる運命として、この2冊を読んでみてはいかがでしょうか。 又ハ・・

平気で保健所へ動物を持ち込む人へ「たったひとつの思い出」を
飼い犬猫をバカだといじめる人へ「ステラレニャン物語」を。

※「ステラレニャン物語」の犬猫の不妊去勢手術の項で、子供の増加を防ぐために不妊去勢をしなければ「生まれてすぐに殺すか、捨てるしかない」という表現があります。飼養できない動物を繁殖させないことが飼い主の務めであることや、遺棄（捨てること）が法律違反である事を書いて頂けなかったことが残念です。 (S. Y)

ビデオ 「優勝の門」

青木玲・他作

75分

ARC事務局で
も貸し出し中

このビデオは、競争用のウマの悲惨な生涯を追っています。青木さんは「ひずめの友通信」という馬の福祉を考える通信を発行している方で、ARCの会員ですが、2年がかりで馬に関心をもつ人々と共に、競争馬がどのような悲惨な最後をたどるかということビデオにまとめました。マスコミ関係でも大きく取り上げられましたので、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、購入希望の方は2000円切手、貸し出し希望の方は360円切手、を同封してARC事務局まで。